

第3講：21 「結構や、結構や」

今回の公開教学講座「信仰に生きる：『逸話篇』に学ぶ」では、以下の逸話について紹介した。

21 「結構や、結構や」

慶応四年五月の中旬のこと。それは、山中忠七が入信して五年後のことであるが、毎日々々大雨が降り続いて、あちらでもこちらでも川が氾濫して、田が流れる家が流れるという大洪水となった。忠七の家でも、持山が崩れて、大木が一時に埋没してしまう、田地が一町歩程も土砂に埋まってしまう、という大きな被害を受けた。

この時、かねてから忠七の信心を嘲笑っていた村人達は、「あのぎまを見よ。阿呆な奴や。」と、思い切り罵った。それを聞いて忠七は、残念に思い、早速お屋敷へ帰って、教祖に何うと、教祖は、

「さあへ、結構や、結構や。海のドン底まで流れて届いたから、後は結構やで。信心して何故、田も山も流れるやろ、と思うやろうが、たんのうせよ、たんのうせよ。後々は結構なことやで。」

と、お聞かせ下された。忠七は、大難を小難にして頂いたことを、心から親神様にお礼申し上げた。

この逸話では、大雨と大洪水で持山が崩れ、多くの田地を土砂で無くした山中忠七に、教祖が「結構や、結構や」「信心して何故、田も山も流れるやろ、と思うやろうが、たんのうせよ、たんのうせよ。後々は結構なことやで。」と仰ったことを紹介した。

一般に、農業に不可欠な田地や畑地を流失するという事は、農民にとっては堪え難い苦しみである。しかし教祖は、あえて「結構や、結構や」と仰り、「後々は結構なことやで」とも仰っている。これは、大きな災難に遭わなければならないところを、親神のご守護によって小さく済ませていただいたことに感謝することであり、そのように通らせていただくことが陽気ぐらしへの確かな歩みであると、教祖は私たちにこのような事例を通してお諭し下さっているのではないだろうか。それが、「後々は結構なことやで」というお言葉に込められていると考える。

ただ、結構に通らせていただくには、教祖は「たんのうせよ、たんのうせよ」と強く仰っていることも考えなければならない。

■「たんのう」して通る

『改訂天理教事典』に、「たんのうとは『足納』であり、満足の思いを心に納めること」とある。しかし現実には、山中忠七のように満足の思いを心に納めることが難しい場合が多い。

「おさしづ」には「よう聞き分けて、たんのうしてくれ。たんのう中、ならん中たんのうするは誠、誠は受け取る。ならんたんのうは出けやせん。なれど一つ、ならん一つの理は、多くの中見分けてたんのう。ならん中たんのうするは、前生さんげへ」と言う。ようこれ聞き分け。」(明治30年10月8日)とある。

「たんのう」とは自分がおかれている状況をそのまま受け入れる心であり、単に我慢を重ねることでもない。親神の真意をもとめ、ご守護のもとに生かされていることを自覚し、喜ぶこ

とである。そのためには「いんねん」を知り、それを自覚しなければならない。

■「いんねん」の自覚

成ってくる姿、わが身に現れてくる事態と人間の思いの間にはギャップがある。それは親神が心通りの守護を現されるからである。そして、人の心は過去の心遣いの集積としてあり、過去の心遣いに規制された心遣いをしているのである。この現在の心遣いを規制し、成ってくる姿を規制する過去幾代の子の心遣いの集積を「いんねん」という。

すなわち、親神は「いんねん」通りの守護をされるのであるが、それは「いんねんの自覚」と、「心の入れ替え」を促すようにとの配慮からである。また「いんねん」が説かれるのは、人間に「陽気ぐらし」をさせようという親神の親心からで、人間に「元のいんねん」を自覚させ、悪しき心遣い（「ほこり」）を改めさせようとの親心からである。

「おさしづ」に、「一つの心治まって居るなら、どんな事もこんな事も、善い事も悪い事も、理の分からん事はあるまい。無理というは立つか立たぬか。どれだけ含む、どれだけどうしようと言うた処が、めんへ心の理もある。又為す事いんねんの理から聞き分け。しようまいと思っても成って来る、しようと思っても成らんがいんねん。この理を聞き分け。」(明治31年2月27日)とある。つまり、成ってきた状況の中に自らの「いんねん」を悟り、自覚しなければ、本当の意味での「たんのう」はできない。「この理を聞き分け」というのは、まさにこのこと悟ってほしいという親心なのである。

■天に届く理

具体的な事例を、『逸話篇』144「天に届く理」にみる事ができる。

教祖は、奈良監獄署へ入牢・拘禁されたさい、便所掃除を命ぜられた鴻田忠三郎に、「鴻田はん、こんな所へ連れて来て、便所のようなむさい所の掃除をさされて、あんたは、どう思うたかえ。」と、お尋ねになり、忠三郎は「何をさせて頂いても、神様の御用向きを勤めさせて頂くとせば、実に結構でございます。」と答えた。これに対して、教祖は、「そうそう、どんな辛い事や嫌な事でも、結構と思うてすれば、天に届く理、神様受け取り下さる理は、結構に変えて下さる。なれども、えらい仕事、しんどい仕事を何んぼしても、ああ辛いなあ、ああ嫌やなあ、と、不足々々では、天に届く理は不足になるのやで。」と、お諭しになった。

どのような状況に置かれても、その現実を素直に受けとめ、親神のご守護と「いんねん」を自覚し、喜び勇んで通ることが「たんのう」することである。またそのように勇んで通ることが、陽気ぐらしへの確かな道筋であり、親神の思召でもある。

私たちは陽気ぐらしへの確かな道筋を歩むことによって、親神がその理を受け取り、大難を小難に、小難を無難にお連れくださるのである。